２０１９年度「全国中学生人権作文コンテスト」岐阜県大会
最優秀賞（岐阜県人権擁護委員連合会長賞）

あなたの見方が変わったら

中津川市立第一中学校２年　鈴木　悠比

「80センチ・7.5㎏」これが、一歳くらいの大きさしかない、僕の弟のみなとだ。弟は、今三歳。普通の子なら座る、立つ、歩く、走る事は当たり前。話す事もできるし、ご飯だって何でも食べられる。でも、弟はその当たり前の事ができない。弟は生まれてすぐに、先天性食道閉鎖症という胃と食道がつながっていない病気があるとわかって、おなかに穴をあけて胃ろうを作ったり、おなかを切って、胃と食道をつなげる手術をした。超低出生体重児で生まれたので、呼吸が上手にできなくて、首に穴をあける気管切開をして、呼吸器をつけていた。生後一日目に大きな手術を、生後八ヶ月までに四回の手術をした。弟はＰＶＬという脳の病気にもなったので、手足にはマヒがあって、思うように動かすことができない。そんな弟を見た時に、あなたは何かおかしい、普通じゃないと思いますか？

「四月の入園は難しいかもしれない。」

そう言われたのは、昨年秋頃のこと。支援クラスがある園へ入園できないかもしれないという話だった。その頃の弟は、気管切開をしていたので、毎日痰吸引の医療ケアが必要だった。僕も小学校六年生から弟の痰吸引をしていたので、吸引回数が多い時は大変だという事も知っていた。

僕の両親は、弟の入園をギリギリまで悩んでいた。それは、医療ケアが必要な子に対して、積極的な受け入れがないことを知ったからだ。入園を一年先に伸ばす事になるだろうとあきらめていた時、僕が通っていた幼稚園の先生から、母はこう言われた。

「みんなでみなと君にとって良い方法を探していこう。みんなで支えながらやっていこう。」それは、入園を進めてくれる言葉だった。歩くことも、話すこともできない弟は、支援クラスのある園にしか通う事ができないだろうと思っていたので、支援クラスのない僕が通った幼稚園に入園できるなんて、正直驚いた。それと同時に、弟の入園を受け入れてくれる場所があって本当に良かったと思った。そんな中、母は親切にしてくれる幼稚園に迷惑をかけてしまうのではないかと心配していた。「私たち職員も、子どもたちも、みなと君から学ばせてもらう事がたくさんあると思う。みんなにとって本当に良い経験になるよ。」先生が入園を一押ししてくれる言葉をかけてくれた。母は先生たちの気持ちがうれしくて涙が出たという。

今年四月、弟は支援クラスのない、僕が昔通っていた幼稚園に入園した。僕は、弟のことを一人の子として受け入れてくれた先生たちに、本当に感謝している。

そして今年の夏、弟は幼稚園の踊りの発表会に参加することができた。周りの友達が、楽しそうに飛びはねて踊っているステージに、弟は歩けないので、車輪つきの台に置かれたイスに座って登場した。みんなと同じように踊れない体だけど、イスに座りながら両どなりの友達にハグしてもらったり、みんなの踊りに合わせて手拍子したりする弟は、本当にうれしそうだった。いつも家で見ている小さくてかわいい弟が、とても大きくなったように感じた。そして、その時の弟は、生き生きした特別な顔をしていた。踊りが終わると、母の周りにいたお母さんたちが

「よかったね！！よかったね！！。」

と母の肩をたたいて、一緒に涙を流してくれた。あれだけ弟の入園を悩んだ両親が、弟を入園させて良かったと思えたのは、周りの人たちのおかげだと思う。

医療ケアがあっても、みんなと同じように幼稚園に入園する事ができて、今、園生活を楽しめている弟は、幸せだ。不便なことはあっても、不幸ではないと思う。僕たち家族を幸せな気持ちにさせてくれたのは、弟が入園できるように考えて、一歩ふみ出してくれた先生たちのおかげだと思う。

あなたの見方が変わったら、世の中の考え方がほんの少しでも変わったら･･･、いつか障がいがあっても、みんなに居場所があって、誰もがやりたい事をできる社会になると思う。弟の入園のように、医療ケア児を受け入れるという事は、命の事を考えると、とても勇気がいる事だ。でも、家庭、園、病院、みんなが意見交流する場を作って、連携をとれるように「つながりの輪」を広げていけば、周りの子と同じようにしてあげられることがたくさんある。幸せな気持ちにさせてあげられる事もたくさんある。

「あなたの見方が変わったら･･･。」

そう言えるように、僕はこれからも周りの人たちに、弟のことを隠さず伝えていきたい。僕よりもたくさん、たくさん、がんばっている大切な弟のことを･･･。